The Whisper from Amherst

エミリィのささやき

冬の弱い斜めの日射しを見ると、気が沈み込んだり、絶望に陥るよりはむしろわずかなぬくもりにありがたみを感じるものですが、エミリィは深い絶望感に襲われました。 押し黙った「冬」の景色、日の入りが早い「午後」、薄暗い室内に「斜めに差し込む日射し」に、エミリィは大聖堂の調べが重く鳴り響くのを聞いたかのような重苦しさをおぼえ、命の衰え、終焉の暗示を感じて書いた詩を紹介します。

‘There’s a certain Slant of light,’

There’s a certain Slant of light,
Winter Afternoons —
That oppresses, like the Heft
Of Cathedral Tunes —

Heavenly Hurt, it gives us —
We can find no scar,
But internal difference,
Where the Meanings, are —

None may teach it — Any —
’Tis the Seal Despair —
An imperial affliction
Sent us of the Air —

When it comes, the Landscape listens —
Shadows — hold their breath —
When it goes, ’tis like the Distance
On the look of Death —

冬の午後には
斜めに差し込む一条の光がある
大聖堂の調べのように
重くのしかかる

聖なる傷をおわせる
傷あとは誰にも見えない
が　意味が生まれるところ
こころのなかで何かが違ってくる

誰もそれを告げることはできない
それは封印　絶望
空から送られた
至高の苦悩

それが来ると　風景は聞き耳をたて
影は　息をのむ
立ち去ると　遠くを見ている
死の呆とした顔のよう

（思潮社「エミリ・ディキンスンを読む」岩田 典子 著）